



21

「開」

あけっぱなし。

これは、たいてい良くない行為だ。誰もが一度は、家族や先生から注意されたことがあるだろう。「ドアは閉めなさい」「冷気が逃げる」「虫が入ってくるよ」などなど。

理屈はたしかにその通りなのだが、最近の僕はこの「あけっぱなし」という行為に対しなにか安心感のようなものを感じている。

たとえば、窓。開けた途端に「待ってました」とカーテンが風に踊るのがいい。かるく窓枠に腰掛けてぼーっとする。虫は光に寄ってくるというから部屋も暗くして。これってすこしは対策になってるんだろうか？

共同生活においてはマナーもあるし、もちろん限度はあるけれど、完全に閉じるといふ行為にちよっと緊張感を覚える。閉じた瞬間にすべてが区切られてしまうような。少しさみしい気持ちとでも言おうか。

僕が最近もっているスタジオの防音扉もそうだ。分厚くて、それこそ閉めれば、外界の音を遮断できる。シンとした空気。ドラゴンボールの『精神と時の部屋』って多分こんな感じだ。

優れた設備だが、声や音を出していないときはたいてい開けている。せつかくの防音なのに。そもそもここは建物の一室なのだから、部屋をでてもまだ別の部屋があるだけ。それでもどこかに「外の空気」を求めてしまうのだ。

そういえば子どもの頃、押し入れの中で秘密基地を作って遊んでいたときも、扉を少し開けていた気がする。完全に閉めてしまうのと少し開けておくのと、酸素濃度はそんなに変わらなさそうだが、締め切ったままではたちまち息苦しくなってしまう。隠れるような場所に自分から入っておきながら、心のどこかに、誰かに見つけて欲しい気持ちがあったのだろう。

「ちょっと開けておく」ことが、自分と世界とのつながりを残す手段だったのかもしれない。

開けたままにすることには、確かに無防備さがある。

でも、それが余白になる。誰かが来るかもしれない、風が通るかもしれない、音が届くかもしれない。

閉じてしまえば確実にシャットアウトできるけど、開けておけば、まだ何かが入ってこれる余地がある。

その「まだ」に、自分は救われているのかもしれない。

季節が変わって、窓から入る風の温度が人肌のように生ぬるい。今夜もまた、ドアを少し開けたまま、自分の部屋で過ごしている。